

青年期のアイデンティティ形成におけるナラティブの役割

—パーソナリティ心理学におけるナラティブに関する考察と実践における取組みと課題—

THE ROLE OF NARRATIVE IN FORMATION OF IDENTITY IN ADOLESCENCE

—REVIEW OF NARRATIVE IN PERSONALITY PSYCHOLOGY AND IMPLICATIONS IN PRACTICE—

細 川 彩

Aya HOSOKAWA

要 旨

本稿では、パーソナリティ心理学の視点におけるナラティブに関するレビューと共に青年期におけるアイデンティティ形成について考察した。エリクソンによる人格発達理論において、5段階目である青年期における危機は「アイデンティティ」であると定義されている。アイデンティティとは、個人の同一視であり、自己および自己の存在意義の受容、人生における目的の認識、社会における自己の機能を見出すこと、過去のエピソードや経験を意味付けること、未来における予期される自己を表象することである。パーソナリティ心理学領域の研究では、人生についてのナラティブの中に見出されるアイデンティティはパーソナリティであるとも考えられている。従って、特性、特徴と共に、歴史、文化、社会の文脈における適応に言及しつつパーソナリティ心理学における歴史的発達を概観することにより、アイデンティティとパーソナリティ形成にナラティブがどのように寄与するかについて考察した。これらのパーソナリティ心理学に関連する最近の研究に基づき、ナラティブは、個人のライフストーリーおよびライフヒストリーを執筆するという様式（自分史作成）で多くの領域において用いられている。筆者が関わってきた高齢者の自分史講座プロジェクトの取り組みの中では種々の問題が提起された。その問題解決へのアプローチとして、自分史プロジェクトの先駆けである、「異世代間交流としての自分史づくり」として2001年より継続している今治市の取り組みについて調査した。今治市の取り組みが成功している背景には、すべての人がコミュニティに貢献する「資源」であることへの気づきがあった。つまり、自分史づくりがどの参加者にとっても有意義で、目的が明確でなければならず、加えて、異世代間での継承性が学習を生み出すことを認識させることが必要であるということであった。

Abstract

In this paper, the role of narrative to form identity in adolescence was discussed with review of narrative from the perspectives of personality psychology. According to the personality developmental theory by Erik Erikson, the crisis assumed in the 5th. stage, adolescence, is "identity," to form and find out what individuals' identity is; to accept the self and the reason why the

person exist in the world, to recognize his/ her purpose in the life, to find how he/ she functions in the society, to make sense any episodes and experience in the past, and to represent prospective self in the future. Studies in personality psychology reported that those identities often represented in narrative of individual life could be considered personality. Thus, how narrative contributes to formation of identity and personality was discussed with overview of historical developments in personality psychology referring to traits, characteristics, and adaptation in the contexts of culture, history, and society. Based on those recent studies related to personality psychology, narrative has been taken up as one of methods in many fields including the style of writing individual life-story or life- history. Challenges raised up in the practice on the project of writing class of life-story by older adults, I have been involved, suggested learning from the better and long lasting works. The remarkable project of making booklet on life-story of older adults written by children in local community, coordinated by Imabari city from 2001, implied the importance of awareness that each person can contribute to the local community as "resources." Plus, the program let each participant recognize meaning and purpose of expressing life-story at which generativity yields learning through interaction by different generations.

キーワード：ナラティブ、アイデンティティ、青年期、パーソナリティ心理学、ライフストーリー

Key words : narrative, identity, adolescence, personality psychology, life-story

エリクソンの人格発達理論では、8段階におけるそれぞれの対で結ばれた危機のうち、前者が後者を相対的に上回る形で獲得されることが、健全な人格形成につながるとされている。乳児期（「信頼」対「不信」）、幼児前期（「自律性」対「恥・疑惑」）、幼児後期（「自発性」対「罪悪感」）、学童期（「勤勉性」対「劣等感」）、青年期（「アイデンティティ」対「アイデンティティ拡散」）、成人前期（「親密性」対「孤立」）、成人期（「世代性」対「停滞」）、老年期（「統合性」対「絶望」）の8段階に分類されたエリクソンの人格発達理論によれば、5段階目である青年期の心理社会的危機は「同一性対同一性混乱」と定義されている（Erikson, E. H., 1959）。厳密には、「同一性」は、「エゴ・アイデンティティ（ego identity）」であるが、一般的には「アイデンティティ」あるいは「同一性」、「自我同一性」と呼ばれることが多い。エリクソンの人格発達理論は、所謂、アイデンティティ理論ともよばれるように、「アイデンティティ」という概念が基礎となっている。そ

の理論は、エリクソン自身の生い立ちと密接に結びついて生まれてきたと考えられており、彼自身の人生が自らのアイデンティティを模索し続けた人生そのものであった。フロイトによる精神力動の概念や精神分析および自我心理学もまた、彼自身の人生の各ライフステージにおいて経験した欲求や衝動などの心的エネルギーと実現との葛藤などの内観が少なからずとも理論の確立に影響した。自分が何者であるか、自分は人生において何を目的とし、自分の人生と存在意義は何であるのか、などの自己を社会のなかに位置づける問いかけは、すべての人間にとって生きるうえでの普遍的テーマである。このテーマに対し、肯定的かつ確信的に回答できることがアイデンティティの確立を示す重要な要素であり、これに対し、自己が混乱し自己の社会的位置づけを見失った状態が、所謂、アイデンティティ拡散となる。

アイデンティティは青年期の危機を示す用語であるが、歴史的、民族的、社会的な一個人の存在全体を示す概念でもあり、青年期のみならずその

人の人生全般に関わる課題と捉えられており、パーソナリティの発達における中核をなしている。そこで、パーソナリティ理解における、自己の回想による人生の物語である、ナラティブの役割と (Allport, 1961)、語り思考 (narrative thinking) という概念により、語りは、心理学において重要な根元的メタファであり、あらゆる個人 (一流の科学者から子どもまで) にとって科学的思考を行う際には、物語やメタファを用いること (Bruner, 1986) の重要性が示唆された。こうした研究動向を背景に、最近では、臨床心理学におけるナラティブ療法を始め、ナラティブ (語り) に基づく自己物語生成の形態をとる「自分史」作り、寓話を「ナラティブ」として用いた精神療法 (Bucay, 1999)、ナラティブを刺激材として用いた成人の記憶研究 (Hosokawa & Hosokawa, 2006) など、あらゆる心理学領域で応用されている。本稿では、パーソナリティ心理学におけるナラティブの役割についての概観から、青年期における自己アイデンティティ形成に寄与するナラティブの可能性について展望した。

パーソナリティ心理学におけるナラティブの役割

パーソナリティ心理学は、1930年代から個性に関して、個人内、間における様々な仮説因子により科学的に説明してきた。G. Allport が提言した法則定立的アプローチ (nomothetic approach) によれば、パーソナリティ心理学は、個人の大量サンプルによる量的データと共に、人間の多様性の単一の側面への探求に焦点を当てつつ個人差を測定する妥当性を確立させてきた。同時に、個性記述的アプローチ (idiographic approach) によれば、人間の多様性における多くの異なる次元に関する概念化や発見の多くを個人のケースとしてのパーソノロジー肖像画へと収束することをパーソナリティ心理学は狙いとしてきた。

過去25年においては、1960年代に優勢であった、パーソナリティ心理学領域における「特性」に関する概念に対し、個人の違いである「特性」

が、行動、思考、感情における多様性の説明することへの限界を示唆する批評が多く、パーソナリティ心理学の領域は混沌としていた。そうした背景のなか、1980年代には、パーソナリティ特性に関する、以下の6つの結論が支持された。1. 行動が状況を越えて集成する際、自己申告による特性は、特性と一致した行動の傾向に有意義に関連すること、2. 特性は、精神衛生、結婚への満足、仕事における成功、寿命といった、人生における重要な結果に関して強力な予測をする、3. 特性における個人的差異は、特に成人期における縦断的一致を示す、4. 特性は遺伝的である傾向が高く、少なくとも特性得点における分散の半分は、個人間の遺伝的差異を説明する、5. 特性は特定の脳の処理過程 (扁桃核や前頭前野など) と特定の神経伝達物質の活動 (ドーパミンなど) と複雑に関連する傾向があり、6. たいていの特性に関する用語は、所謂、5因子 ("Big Five") と呼ばれる5つの基礎的特性クラスター (外向性、神経症傾向、誠実性、同調性、経験への開放性) に分類される。特性をキーワードに、25年にわたる今日までのパーソナリティ心理学における動向は、結論として心理学的個性における重要性を変数として示唆してきたが、その中でナラティブはどのような働きをするかを検討したい。

1970年代後半から1980年代前半にかけて、パーソナリティにおけるナラティブ理論が最初に出現したが、それまでは話し手としての人間、物語としての人生におけるパーソナリティ理論の中で取り上げられたことはなかった。印象深い場面での情動的人生を構成する劇作家として個人を発達させると考える、パーソナリティにおけるスクリプト理論によれば、心理学的にもっとも重要な個人差は、基礎的な特性や欲求とはほとんど関連がないとされた。そのかわり、人生経験を通して構築される、影響が蓄積された場面や規則性生成のスクリプトが重視された (Tomkins, 1979)。これに関連して、McAdams (1985) は、青年後期および成人前期に、再構成された過去と目的的外観を伴った未来を統合することで進化した物語

としての人生を構築し始めることを「アイデンティティのライフストーリーモデル」と定義し、ナラティブアイデンティティを含む物語における個人間のテーマの差異を最重要視した。両者に共通して、意識的にせよ、無意識的にせよ、構築した人生としてのスクリプトや物語の中にパーソナリティーの一貫性が見出されると考えられた。また、ナラティブを生成することによる統合についても示唆された。どのようにして、多くの不一致となる要素を通時的及び共時的な構造へと斉合性を整えるかが重要である。

1980年代から1990年代にかけて、特性に関する研究がパーソナリティー領域において再び優勢となるなかで、ナラティブアプローチは新奇の役割を担い始めた。人生の構成および構築という点に関しては、特性もナラティブも共通しているが、ナラティブは顕在的に状況に言及してくるところが特徴的である。社会的構造の視点を踏まえた多くの研究者により開発されたパーソナリティーへのナラティブアプローチは、日常の会話や文化的ディスコースにおいてライフストーリーの構成を顕在的に位置づけることで、人生を統合し、構成と実践における性別や社会的地位による役割を再認し、多様で文脈に影響される自己をみつめること、つまり、表現とパーソナリティーの発達における意味、一貫性、歴史と文化的分脈の役割が強調された。

最近では、多くの異なった手法を用いた研究により、ナラティブを通して特性や欲求が表象され、その特性が精神衛生や人生における重要な結果を予測する、ということが実証的に報告されている。また、特性に加えて、特定の価値観や道德律が、人生のナラティブ、家族の物語、個人が属する社会やコミュニティにおける広汎な神話によってどのように形成されるのかに関しても検討されている。人生には困難や重要な決断を迫られることがあり、逆境や変化のなかで人間はどのようにして最も妥当な決定を見出し、それがパーソナリティーの発達にどのように影響するのか、ということに関して、ナラティブによるアプローチの寄与は大

きい。どのような自伝的推論の形式を用いてライフストーリーを創り上げるのか、それぞれの異なった推論は心理学的成熟と精神衛生におけるそれぞれの段階と関連するのか、人生のナラティブはどのようにして社会的斉合性を保つのか、時をかけて変化する文脈に対し自己の変化を理解することは可能なのか、などといったナラティブの内観的処理過程に関する関心が寄せられている。

個人の人生に関する豊富な質的データを考察することにより、ナラティブ研究法は、単一のケースにおける特定性を追及する新たな手段を示唆した。パーソナリティーにおけるナラティブ理論は、個人の人生を詳細に追及するための心的自伝の枠組みとして、伝統的な精神分析理論を補強するかたちとなり、パーソナリティー心理学において長足の進歩を遂げた。

近年までは、パーソナリティー心理学は、関連する概念的特定性と実証的妥当性を検証するため、法則定立的研究を体制化する統合的概念の枠組みに関して追及し、個々の人生における個性記述的アプローチの発展を促してきた。状況的分脈や妥当性の観点からの多くの批判への反駁を経て、1980年代に、包括的にパーソナリティー特性を分類する、所謂、5因子("Big Five")へ辿り着いた。しかしながら、その特性分類は、自伝的、社会的、歴史的な文脈における個人全体を把握するための包括的枠組みを呈するパーソナリティー心理学の本質とは、大きくかけはなれていた。最近になり、漸くナラティブ研究により新たな統合的枠組みが示唆された (McAdams, 2006b; Singer, 2005)。その新たな視点によれば、心理学的個性の説明となる3つの異なる水準があるとされた。

第一の水準は、性質的特性 (dispositional traits) である。5因子を包含する分類法と同様に、性質的特性は、外向性、抑うつ、親近性、従順、遊び、好戦性、冒険探究の傾向、非攻撃性の感度などといった個人間における、広汎的、双極的、比較的、そして非文脈的な差異について言及した。自己申告や peer rating による質問紙により典型的に診断された性質的特性は人間の個性の

大枠を呈示した。具体的には特定の人物が一般的にどのようなか、多くの異なった状況で、多くの場合どのように振る舞うか、他者はその人物を典型的にどのようにみなすかなどである。それらは膨大で非文脈的構造であるため、特性は、パーソナリティにおける特殊性、処理過程、文脈、変化に関しての説明には適していない。せいぜい、初めて出会った対象についての大まかな対人認知を描写する、いわば、「見知らぬ他人の心理」を示唆する程度である。

第二の水準は、心理学的個性を詳細に説明する特徴的適応である。特徴的適応は、時空間や社会的役割における文脈化に関連する、パーソナリティの側面を特定する。動機づけ、社会的認知、発達の関連を包含することにより、特徴的動機、ゴール、努力、関心、態度、価値観、コーピングスキル、防衛メカニズム、関係性の様式、社会的スキーマ、段階における特定的事項、領域による特定の反応パターンなどについても説明する。特徴的適応は、特定の時間、状況、社会的役割において、何を欲求するのか、そしてそれを得るためにどのような手段を用いるのか、あるいは何を欲求せずそれを回避するのか、ということに関して示唆する。性質的特性が、人物についての一般的な描写をするとすれば、特徴的適応は、日常生活における特定性について言及する。つまり、その人物が特定の状況においてどのように振る舞うのか、特定のストレスを処理するのか、人生における特定の時期に最も心を寄せる対象が何であるのか、などについてである。

第三の水準とは、自身の人生を筋道立てるために構成する自己のナラティブを内在化し、進化させていく統合的ライフストーリーである。第一の水準である性質的特性も第二の水準である特徴的適応も人生における種々の問題を処理するというに関して触れることはなかった一方で、人生を筋道立てるということに関して手がかりを与えるのがナラティブである。ナラティブは、文化、階級、性別、多様な文脈的因子の影響を強く受けながら形成されるため、自己の心理学的構成概念

とも考えられる。つまり、人物とその人生が意味をなす社会的世界が共同執筆を行うのである。文化は、ナラティブ形成のメニューと、個人が体制化し表現するために、経験してきた人生から選択的に引き出す内容を示唆している。物語は生きた経験を形成し、人間はまさに物語の中を生きているのである。それぞれの個人の人生の物語には多くの小さな物語が存在し、異なった特別の視点から描かれる。異なった内在化は、複雑な社会的世界における多様性、変動、個人の人生における不確定性を反映するのと同様に葛藤を生み出す。部分的で自己矛盾な物語ですら人生に何らかの意味や目的を与えることがある。人間が物語を背負っていると同様に、それぞれの特性を持ち合わせている。しかしながら、特性以上に、物語は創造と再創造を繰り返し、遂行され、修正され、抽象的な概念は具体的な例により示され、輪郭を描かれる。そして、任意の文化において浸透しているナラティブに関する内容、構成、表現の規範に沿いながら日常生活の社会的環境学のなかで生かされている。

個人が一般的にどのような人物であるのか、多く異なった社会的生活における要求にどのように適応しているのか、時間を超越して進化を続ける心理学的構成によるナラティブにおいて自身の人生の意味として信じていることは何なのか、ということの説明するためには、結局のところ、心理学的個性に関する研究は、多種多様な特性、適応、ライフストーリーから創造的に取捨選択することが必要とされていると考えられた。

多くの異なった社会や言語が存在すれば、外向性、神経症傾向、誠実性、同意性、開放性といった5因子の分類による解釈が頻度が高いが、それらはパーソナリティにおける第二水準や第三水準に存在する包括的分類ではない。文化の重要性やライフストーリーの構成における可能性を考慮した場合、異なったナラティブの中で、型やテーマにおける類似性を見出すことに対し異議を唱える学派もあり、個々のライフストーリーの独自性や状況、話し手、テキストの複雑性を考慮するこ

との重要性を示唆している。一方で、所謂、"redemptive self"とされる、特定のライフストーリーの形式における栄枯盛衰の分析から、特定の状況下における個人間の共通性も指摘されている (McAdams, 2006)。

McAdams らによる法則定立のおよび個性記述的アプローチに基づく研究によれば、中年期のアメリカ人は、自身の人生を redemption としてのナラティブとして捉え、継承性を重視していた。Erikson によれば、継承性とは、これまでの豊富な経験や知識を次世代へ継承することである。彼らは、自分自身の家族への投資を惜みず、仕事に真摯に従事し、コミュニティーや宗教活動に積極的に取り組む傾向にあった。継承性が高いアメリカ人は、主人公が以下の文脈で存在する物語を構成する傾向にあった：主人公が特殊な利益を人生の初期に享受する、児童期に他人や社会が被る不公平性に対し敏感であること、青年期における明白で強固な価値観の体制を構築し、それは成人期を通じて存在する確固たる信念の礎となる、権力への欲望と愛への欲望との間でのコンフリクトを経験する、未来の社会へ貢献するためのゴールを達成すること、といった内容の物語であった。

性別や人種を超越して、redemptive self は多くの中年期のアメリカ人が継承性に貢献するためのライフストーリーのプロトタイプであることも示唆された。このような redemptive ナラティブは、生産的な男性および女性は祝福された人生の初期への感謝として社会に貢献したいと考え、このことは彼らが成功したことを意味すると示唆した。我々が承知のように、日常生活において、継承性は困難とフラストレーションが伴う作業である。しかし、成人が、主人公がその時に困難を経験しても後に報われる、というところにナラティブのアイデンティティを見出すとしたら、今ここの報われないように考えられる投資（努力）は、未来の世代のためになる、という確信をより一層強く維持することになると考えられる。Redemptive ライフストーリーにおいて、継承性の高い男性および女性が表出する傾向があるということから、

人生における努力は報われるという考えを支持した。

しかしながら、このような redemptive self は、継承性の高いアメリカの成人が自身の人生についてのこうした類の物語を語る傾向があるということについて、アメリカの文化や伝統と同様に述べている。継承性の高いアメリカの成人は、心理学的言語やアメリカの文化的歴史における思考での再体験し言い表しによりライフストーリーは表現される。Redemptive self は、過去300年間にわたり多くの異なる物語の形態へと成形されていき、同様にアメリカ人は自身の人生を、罪滅ぼし、解放、回復、自己充足、社会的動向に沿った上昇などの redemptive のお話として語っている。英雄的個人、つまり選ばれし人物を主人公とした物語では、その明白な運命を伴った人生が危険な世界においてもポジティブな特殊性を生み出すということが描かれている。物語は、アメリカの exceptionalism である深淵で永続的なスクリプトが、成功、回復、発達などの多くの現代のナラティブとして理解されている。

要約すると、過去25年間、ナラティブ研究はパーソナリティ心理学に対し肯定的な影響を与えてきた。まず、ナラティブ理論は、個人の人生における一貫性と持続性を見出すことに新たな示唆をした。パーソナリティ特性に加えて、人々の内在化され進化するライフストーリーは、状況的影響の単純蓄積以上のものであるということにも触れている。ライフストーリーは、行動と意志決定を導き、人々がどのようにして自身の人生における意味付けをするかということについても説明している。次に、ナラティブアプローチはパーソナリティ心理学を再文脈化させることに貢献した。今日、優勢な特性関連領域とは異なり、ナラティブアプローチは、個人の人生における特殊性へとパーソナリティ心理学者を方向転換させ、パーソナリティの発達における性別、民族性、階級、文化の影響を重視する新たな方法へと開眼させた。今日の多くの心理学者たちは、パーソナリティは、性質的特性、特徴的適応、人間の本

質により形成され文化の中に存在する統合的なライフストーリーをパターン化させるものと考えている。生産的な中年期のアメリカ人によって語られる、redemptive selfは、現代のアメリカ人の人生における無数の流れを教授する特定のライフナラティブの形式である。他の多くの分野におけるナラティブに関する視点を考慮しながら、ナラティブ、人々によって語られる種々の物語、心理学的、社会的、文化的人生の物語の重要性を通して、人々が自身の人生を筋道立てる（意味を見出す）、多様な方法論について探求し続けることが、パーソナリティ心理学の課題として示唆された。

青年期における自己アイデンティティ形成に寄与するナラティブの可能性

アドラーによれば、自分自身とその人生に与える意味を正確に把握するために、我々が最も依存しているのは記憶だとしている（Adler, 1931）。ナラティブの中で想起される個人の人生におけるエピソードはその個人にとって重要な価値がある場合が多い。だからこそ、無数の記憶の中から選択的に想起され、語られる、ということになる。我々は、今日に至るまで、乳幼児期あるいは幼児期から始まった過去の歴史と共に生きている。そうした過去の様々なステージにおける自己と現在の自己を記憶がつないでいる。想起される自己とはそれまでの経験のなかから選択的に想起されたり、あるいは自己呈示に基づいて構成される自己である。遡及的に生成される自己のアイデンティティは、記憶が持つ物語構造に支えられている。人生のナラティブという時間軸の中で、青年期のアイデンティティ形成の意義を考えると、我々は過去の記憶から未来の展望的自己の概念にも影響をあたえていると考えられる。これは、拡張的自己という概念であり、記憶に基づいた過去における自己と未来に予期される自己のことである（Neisser, 1988）。誕生から死までの一生涯を通して、斉合性を持つライフヒストリーにおける自己とも定義されている（Greene, 1993）。我々は、時間軸上の過去と未来へと拡張された自己を生き

ているが、それは単純に過去が未来へ影響を与えている、というだけのものではない。我々の人生と現実世界は、曖昧さ、不確かさ、予測不可能な出来事に満ちている。そうしたなかで、未来への希望がとざされることにより過去の回想がネガティブなものになったり、逆に未来が展望的であると過去の回想もポジティブに捉えられることもある。また、過去の経験そのものではなく、現在の自己受容や適応状態が過去の回想に影響することも示唆されている。つまり、我々の現在の自己概念には、過去の自己や未来の自己も含まれている可能性がある。

自己アイデンティティの発達の軌跡について考えると、想起される自己は、現時点の文脈に影響される。経験を意味付ける文脈において自己が活かされるために過去のエピソードに対する意味付けが変化することもあるということである。従って、過去の経験の捉え方が遡及的な力に依存する発達観においては、自己のナラティブを縦断的追跡により、自己アイデンティティの発達の軌跡の変容を明らかにすることができよう。こうした意味から言えば、青年期にそれまでの人生のナラティブを生成し過去を振り返り未来の展望的自己について考察することは自己アイデンティティの形成およびその後の人生のあり方を考える際に有意義であると言える。

ナラティブは語り手と聞き手によって成り立つ。語り手は人生の主人公としてその自己物語の文脈によりパーソナリティの統合性や一貫性を見出す。一方、語り手の及ぼす影響は大きい。ナラティブは記憶に支えられているが、記憶研究において想起遂行成績は聞き手により影響されることが報告されている（細川・細川、2008）。また、過去の経験を語る際に、現時点の自己物語の文脈において自己評価をするのと同時に、聞き手によって再評価される訳である。このときに、自己評価はネガティブであったとしても、聞き手によりポジティブに再評価された場合には、過去のトラウマから解放されたり、ネガティブな経験にも人生における意味を見出すことが可能となるのである。

我々は、誰しも、可能であれば消去してしまいたい過去の経験を多かれ少なかれ背負って生きている。そうした過去の経験を書き換えたり消去したりすることは不可能であるが、その解釈は如何様にもなり、それは常に生成され続けるナラティブの開放性を示唆している。また、語り手も聞き手も異なった価値観やパーソナリティーを持つ個人であり、常に中立的な立場で語ることも聞くこともできないということにも留意すべきである。我々の思考は、聞き手を前に初めて分析的に表象されるが、その際に、語り手は自分の語りが聞き手に受け入れられるかどうかを考慮する。そのため、語り手がそれまで気付かなかった自己アイデンティティーと遭遇することもある。このような自己アイデンティティーは、その個人が生きている自己物語の文脈のなかに存在しているが、ナラティブは絶えず生成されていつという側面に注意しなければならない。ナラティブによる自己物語は固定的なものではなく聞き手の存在により生成、変化していき、延いては自己アイデンティティーも変容していくのである。つまりはその個人のパーソナリティーの変容も示唆している。

今後のナラティブを用いた実践における課題

こうしたパーソナリティー心理学に基づき、最近では、個人のライフヒストリーあるいは「自分史」作りという形式でのナラティブが様々な領域で用いられている。筆者が実践でかかわってきた東北大学教育学研究科による自分史講座プロジェクトにおいては種々の問題提起がなされてきた。これらの課題について検討してみたい。

東北大学教育学研究科主催の仙台市社会教育施設との協働による高齢期学習プログラムの開発として、高齢者を対象とした自分史講座が開講された。年間十数回の講座の中で、これまでの人生について自由に語り、その集大成として自分史を作成することが目的であった。しかしながら、これまで自分の家族にすら語ることもなかった自分史を、講座で初めて出会った受講生を前に語ることに躊躇する受講生がほとんどであり、その難しさ

や聞き手を前に語ることの意義を見出すことへの困難が露呈された（石井山・加藤・細川・松本、2010）。こうした「語る」ことへの抵抗により講座が順調に進まない現状を踏まえて、「自分史づくり」の先駆けともいえる、愛媛県今治市社会福祉協議会の取り組みについて、関前支部長である島崎義弘氏にインタビューを行った。2001年に始まった自分史作りは現在も活動をつづけ、地元の異世代交流として大きな貢献をしている。

愛媛県今治市関前地区は、中心市街の北、瀬戸内海に浮かぶ、岡村島、小大下島、大下島の3離島から成る。全人口678人のうち、348人が高齢者、高齢化率56.34%の地域である。「せっかく同じ村（旧関前村であった）に暮らしているのだから、もっと知り合いになろう。」と呼び掛けた、今治市社会福祉協議会の関前支部長の島崎氏は、地域で唯一の岡村小学校の児童と高齢者の文通活動を試みたが、一方通行になりがちで交流も薄いものだった。そこで、児童と高齢者の両者のつながりに着目し「子どもたちによる高齢者の自分史づくり」を2001年より開始し、現在もその取り組みは続いている。

この「自分史づくり」では、異なった学年の小学生が4ないし5名で班となりそれぞれの役割を決め、高齢者の自宅を訪問し1時間30分から2時間、各高齢者の自分史に関するインタビューを3～4回程度行う、という手続きをとった。インタビュー内容に基づき、文章、写真、絵などを自由に用いて冊子に仕上げ高齢者に贈呈するのである。このような活動が成り立ち10年以上も継続していることには理由があった。それは、高齢者も児童もともに「社会資源」とであるという考え方であった。過疎化が進む地域では、災害や病気などの非常時に、互いに信頼し合い、助け合うという関係を構築していることが不可欠である。地域性を重視した福祉教育の重要性を住民が認識し、すべての人が、それぞれの年齢、性別、社会的立場で可能な限りの労働力および貢献をすることでコミュニティワークを充足し合える環境を創りあげること为目标としていた。金銭的報酬ではなく、

「労働あるいは貢献」に対し、置かれた立場や状況で施行可能な「労働あるいは貢献」により返報することである。そうした意味で、高齢者は児童に「知恵や経験」を提供し、児童は高齢者に「自分史」を作成、贈呈し、また、その地域で長い人生を送ってきた個々の高齢者の「自分史」は「地域史」として郷土の文化を伝承する役割を果たす。高齢者にとって、ライフストーリーとして人生を振り返ることは残された人生をどのように過ごすかを見つめなおすきっかけとなり、聞き手である「地域の孫」により自己アイデンティティが生成、変容されつづける。その一方、児童は高齢者からのインタビューで多くの知識や叡智を学び、また、かれらに「島の宝」とみなされることにより自己アイデンティティの形成にポジティブに影響する。自分史が完成した後も、手紙のやりとりなど、心の交流が行われている。つまり、地域間の人と人との交流、心の交流のための一つの方法として、高齢者と児童の異世代交流プログラム、「自分史づくり」が役割を果たしているのである。

結論として、青年期にせよ高齢期にせよ、ナラティブを用いた実践においては語り手がナラティブに生産的な意味を認識することが重要である。語り手が聞き手に語ることに意義を見いだせない以上、「語らない自由」を理由に、語り手は語ることを躊躇してしまうのは当然である。青年期におけるナラティブは、多くの青年が苦悩する「自己アイデンティティの発見」に多くの手がかりを与えることを、高齢期におけるナラティブそのものが、それまでの知識や経験を次世代へ継承するという社会的認知ゴールを達成し、パーソナリティの発達完成へ寄与することを伝えるのが心理学者の果たすべき役割ではなかろうか。

謝 辞

本稿の一部は、科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究、研究課題番号：2265309、研究代表者：石井山竜平）の助成を受けました。ここに感謝の意を表します。

文 献

- Adler, A. (1931). What life should mean to you. New York: Blue Ribbon Books.
- Allport, G. W. (1961). Pattern and growth in personality. New York: Holt, Reinehart & Winston.
- Bruner, J. (1986). Actual minds, possible worlds. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Bucay, J. (1999). Dejame Que Te Cuento... Editorial del Nuevo Extremo, S. A.
- Erikson, E. H. (1959). Identity and the life cycle; selected papers. New York: International Universities Press.
- Greene, M. (1993). The primacy of the ecological self. In U. Neisser (Ed.), The perceived self: Ecological and interpersonal sources of self-knowledge, 112-117. New York: Cambridge University Press.
- 愛媛県今治市社会福祉協議会地域福祉部地域福祉課 補佐 島崎義弘氏へのインタビュー (2011. 2).
- 細川 彩・細川 徹. (2008). 社会的認知による文脈とライフスタイル条件による高齢者の物語テキストの表面的意味想起の最適化研究. 「東北大学大学院教育学研究科 研究年報」第56集第2号
- 石井山竜平・加藤道代・細川 彩・松本 大. (2010). 仙台市社会教育施設との協働による高齢期学習プログラムの開発. 東北大学大学院教育学研究科 教育ネットワークセンター年報. 第10号.
- McAdams, D. P. (1985). Power, intimacy, and the life story. New York: Guilford.
- McAdams, D. P. (2006a). The redemptive self: Stories American live by. New York: Oxford University Press.
- McAdams, D. P. (2006b). The person: A new introduction to personality psychology (4th Ed.). New York: Wiley.
- Neisser, U. (1998). Five kinds of self-knowledge. Philosophical Psychology, 1, 35-59.
- Singer, J. A. (2005). Personality and psychotherapy: Treating the whole person. New York: Guilford.
- Tomkins, S. S. (1979). Script theory. In H. E. Howe, Jr. & R. A. Dienstbier (Eds.), Nebraska symposium on motivation (Vol. 26, pp. 201-236). Lincoln, NE: University of Nebraska Press.
- ボランティア情報. (2005). 異世代交流をとおして日常的な人の輪を作るプログラム.